特集 よりそい訪問サポートなごや

何してるの？ よりそいって？

よりそい訪問サポートなごやは当協会が受託している名古屋市の家庭訪問型相談支援事業です。このページでは、本事業に関わる様々な立場の方からコメントをいただき「よりそい」がどんな活動をしているのかを語っていただきました。

連携調整員リーダー
板津 英司

その子らしい次の一歩を応援する

『よりそい訪問サポートなごや』は、名古屋市の事業として2018年8月に開始されました。それまで家庭訪問といえば、主に学校の先生や支援機関などが行い、そのやり方は個人に委ねられ、時としてより深刻な状況になってしまうこともあったと聞きます。また、特定の地域で事業として実施されることはありましたが、長期間にわたり継続的に実施されることはありませんでした。そのような中、当事業は継続的に市全体の事業として開始されました。そしてまもなく5年を迎えます。

わたしたちがやっていることは、「子どもの関心のあることをきっかけに信頼関係を築きながら、子どもの気持ちや希望によりそい、その子らしい次の一歩を応援する」ことです。そんな関わりで、多くの子どもたちが自分の気持ちに気付き、表現し、その希望をまわりの人たち（家族、近所、学校、支援機関など）を巻き込みながら一緒に実現してきました。どんな支援が正しいのかなんて分かりませんが、子どもたちが希望を実現していく過程をまわりの人たちと一緒に経験できることがとても大事だと感じています。

わたしたちは本事業における家庭訪問を二つのポイントと一つのキーワードで表しています。二つのポイントは「週1回の家庭訪問」「訪問支援員と連携調整員がチームとなって家庭を応援」、キーワードは「身近なキーパーソン」です。

今回の特集を見ていただき、よりそいのことが少しでも伝わり、興味をもってもらえたらうれしいです。もっと知りたくなったら、いつでもご連絡ください。お話できることを楽しみにしています。

訪問支援員／研修事業
坪井 優弥

私たちの手を届けていくこと

閉鎖的な現代社会の中、名古屋という地域に住む方たちの「支援を必要とする声」はどれほど埋もれてしまっているのでしょうか。皆さんは考えたことはありますか？近所付き合いも減り、他者とのかかわりが薄れていく中、私が訪問した家庭には「助けを呼ぶ声を出せる大人」がいました。その反面、「助けての声を上げられない大人」もいます。その狭間に「助けが必要だけど、助けてと言わない子ども」もいるかもしれません。

一体どんな事情で、どんな私情があるのかは私たちにはわかりません。ただ、子ども達の中には、「助けてほしいけど、言えない、言わない」子ども達も多く存在します。そもそも、「助けが必要だったのか」と後になってから気付くことや、「気付かないまま生きていく」こともあるかもしれません。そんな風に支援に繋がっていない子ども達に、私たちの手を届けていくことが、よりそいのアウトリーチ支援の1つの形であり、課題ともいえるかもしれません。

楽しい事や色々な話をお互いに話したりする

私は、中学生から高校生の最後までよりそいの支援員さんに来てもらいました。始めた時は中学生で学校に行けてなくて人と話すのが苦手なのもあり、最初は何を話したらいいのかと迷ったけど、困ったことや高校に入ってからの高校生活やバイトなど色々な自分の悩みを聞いてくれたりアドバイスをしてくれたり、最近の楽しい事や色々な話をお互いに話したりして友達のように話せて最後の週まで楽しく過ごせました！

時間内は話すだけじゃなく、カードゲームやボードゲーム等でも遊べます！流行りのものや知恵を使ったもの等持ってきてくれて、私と支援員さんでやったり、弟と弟の支援員さんと皆で遊んだり、チームを組んで遊んだりと色々と話す以外でゲームをできたのが良かったし、勝負するのもとても楽しかったです！支援員さんが来てくれることで楽しく過ごせたり相談できたりして、いい時間になるので、そういう時間がほしいなって思ったら支援員さんに来てもらうのがおすすめです！！

よりそい卒業生 Yちゃん

連携調整員
宮崎 博

子どもの気持ちに寄り添って、一緒に遊び、勉強し、相談に乗る

よりそいの連携調整員は、依頼元や家庭に出掛け事情を聞き、親や本人によりそいの事業を説明し、一緒に考えます。その後、連携調整員はその子どもや家庭に合った訪問支援員に毎週1回程度の家庭訪問を依頼して、子どもの気持ちに寄り添って、一緒に遊んだり、勉強したり、相談に乗ったりするなどの活動をスタートさせます。

連携調整員は訪問の様子を訪問支援員から聞き、どう進めていくと良いのか一緒に考え、必要な時に訪問したり、リファー元と相談したりしながら、子どもや家庭をサポートします。

例えば、複雑な事情から引きこもって、誰とも会おうとしない子どもに何とか会える工夫をして、トランプやウノ、釣りなどで一緒に遊び、3月には一人で高校受験に出掛けるまでになった嬉しいケースがありました。チームとして子どもを支えようと頑張っています。

そばに寄り添って全力で考え、応援する

子ども達と繋がるキッカケは様々な理由があります。

ある子どもは、「今こうやって、毎日ゲームなどをして家で過ごしていることが楽しい。でも、自分はこの先どうなるんだろう。きっと、なおちゃんみたいにはなれないんだろうな。取り返しがつかなくなってから、『もう遅い』って後悔するんだろうな。」と話してくれました。

日々の訪問は、一緒にゲームをしたり、外で体を動かしたり、アニメや漫画についてひたすらお喋りをするなど、「遊んでばかり」と言われてしまうこともあります。でも支援員はこうやって毎週子どもの「やりたい」にとことん付き合っているからこそ、子どもが熱中できること、それを他人である支援員に語る力…など、その子オリジナルのすてきな個性をたくさん知っています。子どもも、自分の「好き」「やりたい」に共感してくれる支援員だから、「話してみようかな…」と思ってくれるのかもしれません。

何かをしたいと思ったときに、「もう遅い」なんて事は決してありませんよね。よりそい訪問サポートなごやは、出会った子どもにとって「親密な他者」でありたいと思っています。

子どもの長くキラキラした人生のほんの一時ですが、そばに寄り添って全力で考え、応援する。訪問支援員全員が、心に留めていることだと思います。

訪問支援員／広報室
西尾 直子

「幸せを生む未来への投資」 訪問支援員 NPO法人陽和 渋谷 幸靖さん

A1＿子ども達の生きづらさを笑顔に変え、その笑顔が親をも変えて、子どもの人生を変えていく。その笑顔は、数年後、社会を変えていく力になり、幸せを生んでいく道となる。

A2＿引きこもりの少年が、少しずつ心を開いてくれるようになり、将来の不安や、一歩踏み出す勇気がない事を打ち明けてくれた。会う度に楽しい時間を意識しながらよりそい、親以外の人と触れ合う事の楽しさを知ってもらった。その後、高校進学の話やアルバイトの話を積極的にしてくれるようになり、迷いや葛藤にもよりそいながら、そっと背中を押し続けた。その後彼は、高校に進学をして、コンビニのアルバイトができるようになった。彼の元気な声で「いらっしゃいませ！」という声に、涙が出そうになった。成長を見守れた事に感謝。

「ジグソーパズル」 名古屋市子ども青少年局 板倉 遼さん・山田 大生さん

A1＿よりそいに関わる人はそれぞれが違う個性を持っていますが、みんなが集まって一つの支援、事業を作っていく感じがジグソーパズルのようだと感じています。また、家庭訪問型相談支援事業でもピースが足りなくて、うまく組み合わせられない子どもたちや家庭にぴったりはまるように入ってくれて、一つずつピースをつなぎ合わせてくれる存在でもあるからです。

A2＿訪問支援員さんとの研修に参加させていただいた時に、年代や経歴問わず様々な支援員の方がいてくれることでいろんなニーズに対応できることが強みであることを、実際にお会いできたことで改めて実感しました。話の中で皆さん訪問支援に対して強い思いを持ってくださっていて、よりそいにかかわるすべての方が子どもたちや家庭のために支援をしていることが伝わり、皆さんのおかげで家庭訪問型相談支援事業が続けられていることに感謝の気持ちでいっぱいです。これからも皆さんの力をお借りして、子どもたちや家庭をエンパワーできるよう家庭訪問型相談支援事業をより良い支援にしていきたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。

「オリンピック！」 元訪問支援員 本明 紅さん

A1＿その心は「参加することに意義がある」笑。結果を出すために何をすべきか？ついそう考えてしまいがちでしたが、週に一度、ご家庭の内側に他人が入り、時間と空間を共有し続けること自体に「力」があるのだと今は感じています。

A2＿私は障害を持つ子どもたちの療育のお仕事をしていますが、彼らを変えようとしない事がとても大切だと思っています。よりそいも同じではないかなぁ。短い間でしたが同じ家庭に通わせていただいた先輩支援員さんは、問題（のように見える事象）をなんとかしようとせず、ただひたすら子どもから離れずに存在し続けようとしていました。それこそが「よりそい」。素敵でした！

「代弁者」 名古屋市西部児童相談所 早川 晋平さん

A1＿「本当に自分の立場に立ってくれる相手」と認識されるのは、行政的な立場からは難しいことも多いですが、よりそい訪問サポート事業を利用したお子さんや保護者の方からお話を聞くと、支援員の方がその役割を担っていただいているように感じます。

A2＿あるお子さんの保護者の方から「定時制の高校生に通うお子さんとコミニュケーションが取れず引きこもっていて卒業単位も危うく、子どもの将来が心配」と相談を受け、私の係で支援したケースがありました。児童相談所が家庭訪問すると、私たちはお子さんに扉すら開けてもらえませんでした。児童相談所の職員がお子さんの思いを聞きたい、受け止めたいと思って訪問しても、お子さんには「保護者の側に立った行政機関が指導をしに来た」と感じられたかも知れません。しかし、よりそい訪問サポート事業の導入については保護者の方を通してお子さんも納得してくれ、支援がスタートしました。支援員さんは足繁く家を訪ねてくださり、半分は遊び、半分は学習と子どもに合わせた援助をしてくださいました。支援員さんの継続的な関わりは、お子さんにとってきっとストレスの少ないものであったでしょうし、結果的に進学したいことや、そのために学習を頑張りたいことなど、自身の希望を支援員さんだけには話せる関係が構築されました。そのお子さんは現在無事に卒業し、アルバイトをしていますが、自分の思いを言葉にして受け止められた体験が次のステップに繋がったと感じています。

よりそいって ●●！

ここでは、【よりそいって○○！】とお題を投げ、より自由にみなさんにとっての「よりそい」を語っていただきました。

Q1＿その心は？ Q2＿印象的なエピソード

「優しい言葉」 訪問支援員 中野 瑳緒里さん

A1＿柔らかい響きの優しい言葉。「よりそい」を胸に留めていると自然に、ゆったりした心持ちで、子どもたちの個性や価値観を大切にしながら訪問ができます。人と人が直接会って関われる訪問は温かくて、じんわり味わい深いです。

A2＿何度か訪問を重ね、都度話しかけるものの会話がほとんど続かず、具体的にどうアプローチするか悩んだ事例がありました。そんな折、よりそいの研修で、「愛情を持って、どんな時もその子の味方でいることが大切。」というお話を聞き、その言葉にハッとしました。次からそれを意識して訪問に臨むと、無言の時間も気まずくなくなり、徐々に会話のラリーが生まれました。どんな訪問にも共通する、大切な心構えを学び、実感した瞬間です。

「人の未来」 研修講師 W&H代表 肥後 道子さん

A1＿同じ人(子ども、家庭)だとしても、よりそってくれる人と出会えるか、出会えなかったかで、その未来に大きな違いが生まれます。その違いは可能性そのものだから私には「よりそいって、人の未来」に見えるのです。

A2＿印象的なエピソードは、子どもたちと直接関わることのない私にとって、今までの全ての時間や変化が愛おしく印象的に映ります。立ち上げ期から関わらせて頂き、訪問支援員さん連携調整員さん達が1人1人増えていかれ、「訪問支援員サロン」から連携調整員さんも含めての「サロン」に皆で育ち合っていったことや、訪問や支援の中での葛藤も含めて皆さんから聞かせて頂く全ての気持ちが、印象的でかけがえのないエピソードです。

「自分も成長できる場所」 訪問支援員／研修事業 服部 勲さん

A1＿日々子どもたちの幸せを願い成長を見守り訪問をさせてもらっている中、支援員が変わっていくことで子ども自身も変わり関係性も変化していく。お互いを想い合う気持ちに触れ、お互いに影響し合って変化・成長できる場所。

A2＿子どもの希望は同じレベルでゲームができる支援員。しかし私がやっていたゲームはインベーダーゲーム程度。この支援員ではつまらないと言う始末。一時は支援員を交代した方が良いんじゃないか？と悩みました。相談して子どもの未来のために続けると決めました。出来ない理由より出来る方法に考えを変えて、周りのサポートでゲームの練習をスタート。その後、母親以外とは話さない子どもも変わり、今ではゲームを教えてくれています。

「変幻自在」 訪問支援員 鈴木 小瑚さん

A1＿関わる子どもによって、自分に求められることや子どもたちの接し方、子どもたちからの反応が変わっていくこと、また、普段子どもたちが接している、保護者の方でもなく学校の先生でもない特別な訪問支援員という立場に、やりがいを感じています。

A2＿何かを教える関係であれば「先生」と呼ばれることもあると思いますが、子どもたちやご家族に「名前＋ちゃん」で呼んでいただけることが多いです。

普段子どもたちと遊ぶ、勉強することが多いですが、ご家族には言えないちょっとした内緒話をしたりすることもあります。彼らからみると大人に分類される人、学校の先生のようにかしこまる必要のない、訪問支援員という立場だからこそ築くことのできる特別な関係であると思っています。

BRIGHT FUTURE

当たり前を見直せる力

vol.5 コラム

私たちが考える常識や当たり前という概念。
それぞれの人が持つ価値観や信念は例え家族であったとしても異なる。
その異なる価値観が集まった家庭や職場などが作り出す文化となると異質に感じることも多い。
支援現場においては、個人の持つ価値観を相手に押し付けるような場面が見られることがある。
何を良しとして何が悪いとするか。
時代と共に社会の当たり前も個人の価値観も変化してきている。
それでも長い年月を経て作り上げてきた当たり前を変えていくのは大変なこと。
変えなくても、相手の価値観を受け入れることで、当たり前は見直せる。
例え受け入れられなくても、相手を理解しようとする気持ちがあれば、当たり前は見直せる。
そして理解しようとする気持ちがない支援は暴力にも等しいと言えるかもしれない。
当たり前を見直すことで世界は広がりを持つことができたのではないだろうか。
「この世界に当たり前なんてものはない」
当たり前が成り立つ前提には全ての人の価値観を共通のものとしなければならない。
重要なのは常識や当たり前を疑うことではなく、相手を思う気持ちや感謝だと思う。
それは自分の持つ当たり前を見直す力とも言える。
それぞれ異なる文化や価値観を持っていることを理解し、そこから一緒に何を創り上げられるか。
異なるからこそ新たな発見も創出もできるようになっていく。
簡単なことから始めようと思う。
何かをしてもらったら、当たり前と思わず「ありがとう」と感謝する。
この価値観を自分の「当たり前」にしていこう。

一般社団法人 愛知PFS協会 代表理事 星野 智生

名古屋市子ども・若者の居場所づくりモデル事業

#栄でチルする?

2週間で591名を動員した『#久屋でチルする?』が栄に…!!

誰もが抱く可能性がある「生きづらさ」に対して、開放的なスペースとそこにいるスタッフの受容的な理解を通じて、自己決定、自己選択が保証された「彼らのための居場所」を期間限定でオープン。子どもや若者が気軽に集まり、安心して過ごせる居場所で時間を過ごす中で犯罪被害の未然防止を図るアプローチも行う。

開催日時

6月20日(火)・7月4日(火)・8月29日(火)〜9月6日(水)・10月3日(火)・11月7日(火)
18:30〜21:30

12月5日(火)・1月9日(火)2月6日(火)・3月5日(火)
17:00〜20:00

開催場所

SAKAE HIROBAs (サカエ ヒロバス)　〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄4丁目 5-10の先 久屋大通公園内

お問い合わせ

052-228-0280 (一般社団法人愛知PFS協会)
052-972-3258 (名古屋市子ども青少年局青少年家庭課)

Twitter　Instagram　TikTok　LINE公式アカウント

よりそい訪問サポートなごや

名古屋市家庭訪問型相談支援事業

大切にしていること

『身近なキーパーソン』となる。
子どもや家庭の困りごとに一緒に向き合っていくための「信頼関係」を構築することがすべてに先行する。

対象者

小学校・中学校・高校年齢の困りごとを抱えたお子様とその家族

訪問頻度

原則週1回、利用時間は最大2時間まで

訪問時間

午前9時から午後9時までの間
(土日、祝日、年末年始 (12/29〜1/3) は除く)

担当区域

東区、北区、西区、中村区、中区、熱田区、中川区、港区
(他区域は株式会社トライグループが担当)

場所

対象となる子どもや保護者の希望を考慮し、依頼元機関と協議の上、決定
(例:自宅、近くの公園、フリースペース、大型ショッピングモールのフードコートなど)

受託者住所

〒460-0011　愛知県名古屋市中区大須1丁目21-35

受託者連絡先

052-223-2200

事業責任者

星野 智生 (ホシノ ノリタカ)

事業に関してのお問い合わせ

052-972-3199 (名古屋市子ども青少年局こども未来企画室)

心理相談室こころ 室長(臨床心理士)
外部スーパーバイザー 定森 恭司先生

児童相談所出身の開業臨床心理士の私には、40年以上前から週1回レベルの家庭への定期訪問型の適切な支援ならば、面接室や診察室とは全く質の異なった成果が見込めるという確信がありました。支援者との生き生きとした自然なふれあいが、失いかけていた自己及び世界への信頼を回復させ、笑顔を生みだし、症状や問題行動すら軽減させる場合もあることを実感していたからです。しかしそれを可能とするためには、突破すべき壁があります。この壁を突破しない限り、子どもやその家族を、これまで以上に追い込む危険があるのが家庭訪問でもあります。突破の鍵は、支援者中心型の支援を、「当事者参加型」の支援へと徹底的に転換を図ることにあります。そのためには、「共に悩み共に考え共に笑う」ような協働的関係の構築が必要になります。たわいもない会話や遊びを通じて、支援者が被支援者とその家族にとって「親密な他者」となることが、人間関係が希薄化・無縁化していく現代社会での重要ポイントになるのです。支援者と被支援者が交流を通じて共に変化し、また会いたくなるような関係を構築することがすべての鍵を握るのです。「親密な他者」になることができれば、当事者のニーズに基づくタイムリーな支援が関係者や関係機関を巻き込んで可能になります。しかしながら「親密な他者」になるためには、当事者中心の支援の哲学とその具体的ノウハウを獲得した人材を養成していくことが必須です。人材養成を軽く見る事業者は失敗します。その点、愛知PFSの人たちは、この壁を突破しはじめた人たちであると、スーパーバイザーである私の目には映ります。当事者参加型の共創的支援の場を、この名古屋からみんなで力をあわせて創りあげていきましょう。どうかこれからもよろしくお願いします。